



奇談

# 少女島 (一)

永代美知代

## 黒手組か獨探か

▲名流少女専門の人撰ひ▼

三十人からの少女が、たつた一晚の間に、殆んど一時に、何者か判らぬ者に攫はれた。英國の首府で警察の力の行き渡つたロンドンの目貫の街々から攫つて行かれた。こんな大事件は、まつたくロンドン初まつて以來の出来事である。

それも一通りの少女達ではない。何れも大臣とか

ある。日本人が聞けば、大江山の酒頼童子も及ばぬ怖ろしい出来事ではないか。佛になる前の鬼子母神が、英國へ暴れ込んだのかと思ふ人が萬一としたらあるかも知れないほど怖ろしい話ではないか。

そしてこの怖ろしい出来事は、丁度まゆみが父様の秋月理學博士に伴れられて、ロンドンへ着いた翌翌日の新聞記事となり、およそ英國の貴族上流社會をはじめ、可愛い少女を持つほどの親達を惹くならせたのであつた。

まゆみもこの話を、その日父に連れられて初めて訪問したキングス博士の邸で、令嬢のアスターさんから聞かされた時には、ちよつと息がつまるやうであつた。

『まあ、どうしてそんな亂暴なことを——一體何者の仕業でせう?』

『いろんな取沙汰がありますのよ。黒手組か獨探かどつとそのうちだらうと云ふ事ですけど——ですからね。』

長官とか、陸海軍の將官とか、大政治家とか、又は大實業家など、世界にも有名な人々の令嬢ばかりを選り抜いて攫つて行つたのである。こんな大膽な犯罪は、英國史あつて初めての事である。

攫はれた少女達のうち、二十何人かは英國の名士の令嬢だが、残り十何人は、各國からロンドンへ來てゐる外交官、學者、實業家などの令嬢である。

それがまた、揃ひも揃つて、八歳位から十二歳位までの、本當の少女ばかりを引つ攫つていつたので、アスターは少女らしい無邪氣な眉を美しく寄せ、聲をひそめた。

『私なんかも危ないんですつて。だつて私、丁度十一歳でせう? ね、もしかして攫はれちゃ大變だからつて、學校へも一人で行かないことになりましたの。』

『ちや私だつて用心しなくちやいけませんわねえ。十二ですから。』

『だつてあなたは二昨日ロンドンへ被來たばかりですもの。大丈夫ですわ。』

『あなたも御用心なさいましな。』

『え、難有う。』

二少女は丁度邸の後に廣々と生垣で圍はれてゐる花園の中を歩いてゐるのであつた。キングス博士は英國で一二と云はれる電氣學者であると共に、植物の方でも名高い學者だけあつて、花壇にも温室にも珍らしい花や果物が數多く育てられてあつた。然し二少女は、綺麗な花を見ても立派な植物を見ても、

些しも浮々しなかつた。何か眞黒な魔の手が自分達少女の頭の上に懸されてゐるやうに感じられた。

「もう私の部屋へ歸りませう。そしてあなたのお話を聞かせて頂戴な。あなたはアメリカに五年も被在たのですつてね。」

「え、七歳の秋から一まる五年。」

その七歳の春、慈み深い母は日本で亡くなった。妻に先き立たれた秋月博士は、たゞ一人の娘である可愛いまゆみを連れて紐育へ渡つた。紐育で自分も勉強し、まゆみにも人一倍勉強させたのであつた。そのお蔭で、まゆみは歳こそ十



二の少女であれ、知識も物事の考へ方も、立派に一人前になつてゐた。殊に父の研究してゐる飛行機についての知識は、大人も及ばぬほどであつた。一人で飛行機や飛行船を操縦して見事な飛行振を見せたことも三度や五度ではない。

「少女飛行家秋月まゆみ嬢」といふ名前は、よく紐育の新聞紙に書き立てられたものである。

### 花園に潜む悪魔

▲麻州刺仕込の黒風呂敷▲

釘付けにされたやうになつて、わな／＼震へだしたのが、まゆみの手に傳はつた。

その手を引張つて、まゆみが元來た花園へアスタールを連れ返らうとした時、その怪しげな若者は、もう、つか／＼と少女の傍へ寄つてゐた。

「お嬢さん、アスタール嬢さん、人攫があなたを連れてますから、早くお座敷へお歸りなさい、當分何處へも出ちやいけませんよ。さ早く、早く駆けてらっしゃい。」

低いが方の籠つた聲、顔容に似合はぬ紳士らしい聲で、その怪しい若者は口早にさう云つた。

まゆみは、眞着になつたアスタールを後にかばひながら、屹とした調子で訊ねた。

「一體あなたは何者です。黙つて人の屋敷へ入り込んで！」

「それは今に解りますからな。早くお逃げなさい、早く、僕はあなた方を助けようと思つて來たのだから、愚問々々してゐると來ますよ、人攫が！」

裏庭から花園へ入つて一巡りしたアスタールとまゆみとは、今度は表庭へ出ようとした。花園と表庭とは大輪の花いまを盛りの蕃藪の生垣に區られ、出入口には大きな鐵門が立つてゐる。この鐵門を出ると正門内の表庭で、右へ三十間ばかり行くと大玄関があり、左へ三十間ばかり曲ると屋敷の正門がある。正門から大玄関へは自動車が擦れ違つてもよいほどの廣い並木道になつてゐる。自然の傾斜と樹木とを利用してこの廣やかな表庭は、ロンドンの市外を探しても類稀な立派な庭園であつた。

花園からこの表庭へ出ようとして、まゆみと手を組み合つてゐたアスタールは、一足鐵門を出ると、呀と小さな叫聲を立て、急に立ち止まつた。見ると、鐵門の外に、一人の船員らしい二十四五の若い男が突つ立つて、此方をジロ／＼睨めてゐる。

### 「人攫ひ？」

稻妻のやうな考が、まゆみの頭腦を走つた。アスタールも然う感じたのであらう。顔色を代へて、足は

その聲の終らぬうちに、十間ほど左手の樹立の蔭から、立派な紳士の装をした四十恰好の男の根ら顔がメツと出た。



油断なく四邊に氣を配つてゐた若者は、其根ら顔を見ると、あつと歎息した。「あゝ可哀な想に！然しもう止むを得ん、後で助けるから二人とも少時我慢するのですよ。」

豫て用意をしてゐたのであらう、二少女の頭から手早く黒風呂敷を打ち被せた。それを被せられると一緒に、まゆみもアスターも忽ち氣が遠くなつて、ばつたり其處へ倒れてしまつた。

「昨日ロンドンへ来た秋月博士の娘さ、ついぞだから擔いで行かうよ。」

「よからう。」  
まゆみも、車内へ搬ばれた。二人の悪漢は運轉手臺へ飛び乗つた。その時、花園の遙か彼方で「お嬢さまア——」と呼ぶ女の聲が聞えた。その聲を聞き流して、この怪しい自動車は全速力でキングス邸の正門を馳つて出た。

たとへやうなく胸苦しい。誰か自分の呼吸を塞いでゐるやうである。あゝ苦しい、あゝ苦しいと思ふうち、ひとりでにまゆみは眼を覺ました。眼を開けても、頭腦はぼんやりして、何を考へることもできなかつた。

四五分も経つたであらうか——ふと氣が注くと、自身の身體が寝臺と一緒に揺られてゐた。それは丁度、英海峡の海に揺られてゐたのであつた。

「おや？ 私は何時こんな船に乗つたらう。」

た。風呂敷の内部には激しい麻酔剤が仕込んであつたらしい。

それにしても何といふ大膽さか。時間はまだ午後の三時すぎである。おまけに、根ら顔の男は自動車で正門の内までも乗り入つたと見えて、二少女が倒れるや否や、一臺の軽快な箱自動車を花園の入口まで徐行させてきた。

「うまくやつつけたね」根ら顔の男は、さつさと、アスターを車内へ搬びながら、然う云つて低聲で笑つた。「今一人は日本人ぢやないか。」

半ば身を起して四邊を見廻したまゆみは、廣くはあるが天井の低い下等な船室に、自分と同じ十一二から八歳ぐらゐまでの少女が、その數およそ二十人ばかり、汚ない寝臺の上に死んだやうになつて昏睡してゐるのを見た。その時まゆみの腦中に、あの恐ろしかつた記憶があり／＼と甦つてきた。

「この人達も、みんなあの悪漢に攫はれてきたのだらう——それにしても、アスターさんはどう爲すつたらう？」  
たゞ一つ、薄ぼんやりと點されてゐる電燈の光を頼りに座睡にかゝつてゐる少女達の顔を見廻すと、居た、居た、アスターも船室の隅で昏睡してゐた。あの薔薇色に美しくかつた頬が、電燈の光で灰色に見える。まゆみの眼には熱い涙が湧いた。

つゞく